

1848年に始まった「GOLD RUSH」以降一攫千金を夢見て新興地めざしあちこち飛び回る。そんな旅を続けるうちに放浪癖がついたらもう病みつきになり、アメリカ中を旅し続ける。そういう男がつい70年代までいた。ランディもそんなたぐいの男だった。「俺が死んだら、汽車の行き交う音の聞こえる線路のそばに埋めてくれ。」というのが口癖だった。朝早く貨物列車の操車場に行き、北なり南なり気の向くままに目的地へ向かう貨車にもぐり込む。「運賃は払ったためしが無い」と豪語していた。何処でいつ覚えたのかフラットマンドリンを器用に操り、「RAILROAD BOOMER」や「VIGILANTE MAN」と言う曲をよく歌っていた。レイルロード・ブーマーは古い歌で1941年盲目のヒルベリー歌手でポトルネックの名手ライリー・パケットのヒットナンバー、ヴィジランテ・マンは1964年ウッディ・ガスリーの作品だ。勿論生涯、定住もせずに定職ももたない。金なんか貯めようともおもった事も無いと言い放ち、破れた帽子を目深にかぶりくびれたブーツをひきずって歩いてた。当時8歳だった私はランディの旅の話聞くのがひそかに楽しみだった。

私は家族とともにL A郊外に住んでいた。近所で伯母夫婦は牧場を営んでいた。シカゴから流れてきたランディは伯母の牧場の雑役をする代わりに納屋に寝泊りすることを許されていた。時代が時代だったのであろうか？現代においては身元のはっきりしない人間を受け入れるなどということは考えられないのだが、人手不足と伯父の人の良さでランディの人懐っこい笑顔がこの状況を現実のものにしたようだ。私の両親や伯母は私がランディと接触することを快くは思っていなかった。それもそのはずである、す

でにアメリカ及び一般的なアメリカ人の幸福感は金銭的な成功や、社会的な名声に置き換えることで推し量るという時代に入っていた。夢と自分の嗅覚を頼りに、むやみに人を傷つけたり欺いたりしないかわりに一切の社会的責任を放棄してきた汚く老いばれたランディは、まったく時代と逆行する存在かのように思われた。まさに多感な思春期に突入しようとしている、しかも女の子に妙な価値観のかけらも垣間見せないかと考えるのは、保護者としては当然の思惑である。しかし私にとって、ランディの話にはハックルベリーの冒険話を聞くかのような胸をワクワクさせるものがあった。「シスコでかわいあいの子にあって、もう疲れたから放浪はやめてその子と暮らそうしたけれど、汽車の音が聞こえたらその子を置いてきぼりして、また旅に出てしまった。」レイルロード・ブーマーの歌詞そのままのような話もしてくれた。北の町では、焚き火の横で寝てたらいつのまにか狼に取り囲まれてしまったことや、マフィアに追われて死体の横に隠れたり、絵本を開くようにいるんなことを話してくれた。ランディは遠くを見る眼をして「年老いた身体にはこの暖かい気候が嬉しいんだよ。」と言った。乾いた温かいこの土地は見渡す限りの青空の下に広がっている。新緑の木々の葉をゆらす風はやさしく彼を包んだ。

その後しばらくして私はマサチューセッツ州の学校に進んだ。実家との手紙のやり取りのなかでランディがまたフラリといなくなったことは知っていた。そのままボストンで放送関係の仕事についた。そして結婚し二人目の子供が産まれた時にL Aに戻った私は地元F M局の番組制作の仕事に携わっている。もともと音楽の好

きな私は、ラジオ局の膨大な資料室のなかで選曲をする作業を担当している。ある日、何十年も忘れていたランディのことを思い出すレコードに出会った。ライ・クーダーのブーマー・ストーリーというアルバムにランディが良く口ずさんでいた「レイルロード・ブーマー」が収録されていた。当時は何も知らなかったけれど、40年代からのこれらの遺産はテキサス、ニューオリンズ、LA各地のコーヒーハウスやホンキートンクは酒場で日銭を稼ぎながら歌い歩いていたフォークシンガー達によって口から口へと歌いつながれてきたのだ。ランディもそんな一人だったのかも知れない。ライ・クーダーの初期の作品にはアーリー・アメリカの国中HO・BOして歩く男の世界がよく歌われている。最初のリリースが1941年で、ライ・クーダーが1972年、自分がこの発見をしているのが2002年、ランディが見つないでくれたアメリカ男のロマン。アメリカの男は誰しも旅する夢を持っている。時代とともにその移動の手段は変わって

くる。オースマンブラザーズバンド、後期のヒットナンバー「ランプリンマン」にはグレイハウンドが出てくる。そして車・バイクと個人的なものになっていくが根底にはまだ見ぬ土地への憧れと旅する男の生き方を夢見る気持ちが見え隠れする。最近の私の番組にはこの手の曲を意識的によくかける。実際リスナーからのリクエストも多い。D Jのモニカも「そんな夢を見る男なんてろくな者じゃないわ!」と言いながらもまんざらでもなさそう。私はつぶやく。「ランディ、あなたの見ていた遠くの“居心地のいい”場所はあった?」



### What's HO-BO?

アメリカの19世紀後半は、鉄道建設ラッシュだった。20世紀前半になると、全米に張り巡らされた鉄道を利用して、北から南へ、東から西へと仕事を求めて渡り歩く人々が増え出した。その多くは鉄道建設に従事する目的でアメリカ大陸を放浪したという。こうした放浪者はいつの間にか「ホーボー」と呼ばれ、彼らの悲哀をうたった曲も流行した。ホーボー・ソングとは放浪者を題材とした古くからうたわれてきたフォークやカントリーを指す。またホーボーの発祥地は、鉄道建設が盛んに行われたアメリカ西部だとも語られている。汽車をタダ乗りしながら全米を放浪した人物を、一般的にホーボーと呼んだ。...ホーボーと同じ意味を持つ「トランプ」「バム」なども古いフォーク&カントリーには登場する。...ホーボーは働きながら汽車を利用して全米各地を渡り歩く放浪者だったつまり労働意欲があるさすらい人だという。...トランプはやはり汽車のタダ乗りを得意とするものあまり働く気はなく常に夢を追いながら放浪した。バムはホーボー仲間からも軽蔑された放浪者で常に酒を求めて酔っ払いの日々を送ったという。

『アメリカ音楽ルーツ・ガイド』(音楽之友社)監修:鈴木カツ - ホーボー・ソング - より抜粋

essay&illustration 山内 久由紀 YAMAUCHI HISAYUKI

サーフ・ハワイアン・ミュージック・バンドという独自のスタイルで、心地良いサウンドを追求するブレ・ボーイズのメンバー。ギター&ヴォーカル担当。12月22日横浜・Millions of Tastes Deli-Carteでのライブが決定。詳細は「Hawaiian Service」<http://hawaiian-market.com>、「Millions of Tastes Deli-Carte」<http://www.stovesyokohama.com>まで。